シンポジウム・学会研究会報告

第18回日本音楽療法学会信越・北陸支部学術大会報告
－「いのちを支える音楽療法」をめぐって－

髙橋　和奈枝

長野医療衛生専門学校　音楽療法士学科

はじめに

2021年6月19日から7月19日まで、オンラインにて第18回日本音楽療法学会信越・北陸支部学術大会が開催された。第18回大会は、日本音楽療法学会信越・北陸支部の5県（石川・富山・長野・新潟・福井）のうち長野県の担当回であり、2020年6月6日、長野県上田市の上田市交流文化芸術センター（サントミューゼ）での開催が予定されていた。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、当初の大会は延期となり、1年後の2021年に信越・北陸支部としては初めてのオンラインによる開催の運びとなった。

現在、信越・北陸支部には約250名の会員が在籍しており、学術大会には139名の参加があった（オンライン開催ということもあり、他支部からの参加も複数見られた）[1]。本校からも教務、非常勤講師、卒業生などが参加した。本大会は筆者が大会事務局長の役割を担当させていただく機会に恵まれ、大会開催のための業務を学ぶと同時に、大会における各講座について講師とやりとりを重ねながら学びを深める貴重な機会となった。本稿では、大会概要や内容に触れながら報告を行う。

大会テーマ「いのちを支える音楽療法」

大会が行われる予定だった2020年は、国内のみならず、全世界的にコロナ禍に見舞われ、歌唱や他者との接触を伴う音楽療法の現場の臨床にとってこれまでに体験したことのない困難の時代を迎えていた。延期された2021年もその状況は継続しており、人と人が場を共にして向きあって臨床を重ねていく意味、人と人が共に音楽をする意義、その必要性と音楽療法の存在意義について議論が重ねられていた。そのような状況の中で、進行性の神経疾患であるALSの音楽療法に医師として長年携わってきた近藤清彦氏（相澤病院脳卒中・脳神経センター顧問、相沢東病院診療部部長）を大会長に迎え、「音楽」は「いのち」に密接に関わり、音楽療法は「いのち」を支える重要な役割を果たすという考えのもと、「いのちを支える音楽療法」が大会テーマとして採択された。

大会プログラム

本大会のプログラムは、学術大会と講習会に分かれており、学術大会は市民公開講座（大会長講演）と講演（各90分）、講習会は公開スーパービジョンと講演（各90分）の合計4枠を設定した。4枠の内容と講師は表1のとおりである。オンライン開催期間中は繰り返し視聴可能とした。

（表1）大会プログラム（敬称略）

【学術大会】
近藤清彦「いのちを支える医療と音楽」
中山ヒサ子
「ホスピス／緩和ケアにおける音楽療法の意味」
【講習会】
松井紀和　公開スーパービジョン（精神科領域）
久保田牧子
「音楽療法におけるスーパービジョンの意義
～臨床の手応えから事例研究へのつながり」

長野医療衛生専門学校　音楽療法士学科
〒386－0012　長野県上田市中央3-8-1
jim5@nagano-iryoueisei.ac.jp

「生命」と「いのち」

学術大会の２講演では、大会テーマ「いのちを支える音楽療法」を題材とした内容が扱われた。本大会のテーマである「いのち」の表記が「生命」でも「命」でもなく「いのち」という平仮名が用いられた意味について、両講師の講演の中でそれぞれ言及されていたのが印象的だった。

近藤は「2つのいのち」について柏木（2005）[2,3]の引用から「生命」は有限、客観的、測定可能（心肺機能）であり、「いのち」は無限、主観的、測定不能（生きる意味、価値観）であること、また「2つのいのち」はギリシャ語では「ビオス」と「ゾエ」といい、前者は肉体的生命を指し、後者は精神的いのち、感情、意志、願望、生きる意味を指すとした。そしてこれからの医療は「生命」を救う医療と「いのち（生活・人生・生きがい）」を支える医療の両者が必要であると強調した。

中山ヒサ子氏（和・ハーモニー音楽療法研究会理事長）もまた、「生命」は身体としての「生命」すなわち生物学的生命、「いのち」はその身体をもって生きている人生、替えることのできない固有の「いのち」と説明し、人間は自分の物語を生きている存在であり、音楽は、その「物語られているいのち」を完成させる一助となると強調した。

両者に共通するのは、音楽療法が担うのは後者の「いのち」を支える役割だということ。「いのち（ゾエ）」は精神的いのち、感情、意志、願望、生きる意味などの側面を表す。音楽療法では、それらに重点を置くことで、クライエントひとりひとりの人生、替えることのできない固有の物語を支えるというものだ。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、音楽療法の臨床が実施できない施設も増加していると耳にする。しかし、本講演を通して音楽療法の扱う「いのち」や担うべき役割について考える機会を得て、改めてその必要性と存在意義を再確認できる講演であったと考える。

スーパービジョン

学術大会の２枠が「いのちを支える音楽療法」の理論編とすると、講習会におけるスーパービジョンを扱った２枠は実践編と言える。質の高い音楽療法を実践し、その質を保ちながら継続させるには、スーパービジョンが欠かせないと考える。

近年、日本音楽療法学会でも本部企画として、スーパーバイザーの養成に尽力しており、仲間同士のピアスーパービジョンの実践の広がりが期待されている。音楽療法士は職場によっては、同じ職種の同僚の少なさから、他職種との連携や他職種への音楽療法の説明が求められる場面も多く見受けられる。一人では臨床や研究の進め方に行き詰まることも多い。そこで悩みを抱えたスーパーバイジーがスーパーバイザーに悩みを共有することでスーパーバイジー自身が活路を見出していくプロセスがスーパービジョンである。

講習会の２枠のうち１枠は松井紀和氏（日本臨床心理研究所所長）による公開スーパービジョンである。実際のスーパービジョンは会場において対面で行われたものを録画し、視聴者にスーパーバイザーとスーパーバイジーの生のやりとりが臨場感をもって伝わることが意図された。スーパーバイザーからは精神分析的な観点からスーパーバイジーとのやりとりが進められ、スーパーバイジーの気づきが促されるプロセスを共に体験することができた。もう１枠は久保田牧子氏（国立病院機構相模原病院）によるスーパービジョンの概要とスーパービジョンが事例研究や臨床に実際にどのように影響を与え、功を奏したかについての講演であった。スーパービジョンの定義、目的、機能などが体系的に理解でき、スーパーバイザーとスーパーバイジーの織り成すダイナミズムがいかに創造的で意義あるプロセスなのかが伝わる内容であった。１枠目のプロセスの理解がより深まると同時に、スーパービジョンを受けることの意味と意義が伝わる講演であった。

おわりに

本大会は、信越・北陸支部においては、オンラインによる初めての大会開催の試みであった。参加者として実際にオンデマンドの映像を視聴してみて、1ヶ月の間に、①学ぶ時間帯を選べること、②移動せず自宅で学べること、③繰り返し視聴できること、④一時停止機能で自分のペースでノートを取れることなどはメリットとして考えられた。しかし、一度きりの緊張感の中で学ぶ、講師に直接質問できる、他参加者と意見交換するなどの環境は本大会では実現できなかったため、今後もオンラインでの大会が開催されることがあれば課題としたい。

本論を作成している 2022 年においても、新型コロナウイルスの感染拡大はいまだに収束が見られていない。「いのちを支える音楽療法」をめぐる探求は今後も続けていきたい。

文献

1 日本音楽療法学会信越・北陸支部学術大会事務局. 第 18 回信越・北陸支部学術大会―いのちを支える音楽療法―実施報告書. 2021.

2 柏木哲夫.「いのち・こころ・いやし」と音楽療法. 日本音楽療法学会 第 5 回日本音楽療法学会学術大会要旨集. 2005; 26-27.

3 柏木哲夫.「いのち・こころ・いやし」と音楽療法. 日本音楽療法学会誌 2005;5(2):139-148.

受理日：２０２２年３月２３日